

# ゆっくり やんな。

樋口明雄

山梨県北杜市



Illustrated by Shusay Yamamoto

都内杉並区阿佐ヶ谷、JR中央線のガード下にその小さな店があった。

地味で、目立たず、今どきの若者なら興味もなく前を通り過ぎてしまおう佇まい。阿佐ヶ谷駅近辺にひしめくあまたの飲み屋の中で、決して脚光を浴びることもなくその店は存在していた。

頭上を列車が通過するたび、高架全体が崩落しそうなほど轟音が響く、狭苦しく小便臭い猥雑な空間にあって、モノトーンの意匠の中に埋没するように溶け込んでいた。

しかしながら、昏く、今にも消えそうな袖看板の白い

さに昭和という時代を体現するようなレトロな雰囲気の中に、奇妙な風体の男が立っている。

無国籍という言葉がいかにも似合う、日本人だかガイジンだかわからない顔は、いつもしかめっ面。時代遅れのスタジャンを羽織り、冬でも足許は素足にサンダル履きだった。

彼はみんなにジェリーと呼ばれていた。

独特のガイジン顔が喜劇役者のジェリー・ルイスに似ているとか、ジェリー藤尾そっくりというのが理由らしい。そのくせ、本人は向島生まれの生粋の江戸っ子だと息巻く。

酒は醸ビールに日本酒、焼酎。メニューは品書きに並んでいるが、いつ注文しても「できねえ」というから、だったら何が出るんだと訊いたら、決まったようにシソ巻きのつくねを炭火にのせ、団扇であおぎながら焼いてくれた。

○

当時、怪しげなローン会社から幾ばくか借りねば暮らせないほどのジリ貧だったがゆえに、〈木菟〉のように安く飲める店があった。

それにこの居酒屋、主人のジェリーばかりでなく、客の多くが個性的で、底抜けに明るかったということもあって、ぼくはすっかり常連になってしまった。

ここで会う常連客は、小説家、ライター、漫画家、編集者、イラストレーター、デザイナー、新聞記者といった連中が目立ったが、他にもプログラマー、カメラマン、造園業、

光と、猛禽の切り絵が描かれ、藍色に染め抜かれた暖簾の向こうにある扉をガラリと開けば、寂しく人生を送る男や女が、ほっとつかの間の安息を得ることができるL字のカウンターが、そこにはあった。

店の名は〈木菟<sup>みずく</sup>〉といった。ウナギの寝床のような狭い飲み屋である。

土間にテーブル席がひとつ。あとは手作りの吊り行灯が並んだ下に、古めいた大きなカウンターがあつて、ま

美容師、薬剤師、肉屋、武術家、俳優、ミュージシャン、そして歌手。

そんなさまざまな人種、しかも極めつきの変わり者ばかりが狭い店に集まり、百鬼夜行のごとき酒宴を繰り広げていたのだから、はまらないほうがおかしい。

たしかに阿佐ヶ谷という街には、なぜか変わり者が多かった。そういった連中が集まってくる、一種のパワースポットだったのだと思う。

昼間はまず彼らを見かけない。いや、もし道ですれ違ったとしても、あまりにも顔が違うから、それと気づかないのかもしれない。そんなスーパーナチュラルなキャラクターが、とつぷりと日が暮れる頃になると、満月に照らされた狼男のごとく正体を現して、あちらこちらの店に出没するようになる。

ビールに日本酒、焼酎のお茶割り。グラスが空になれば、すかさずおかわりを続けてチェインスモークならぬチェインドリンク。だもんだから、午前様にならぬうちに、みんなベロンベロンになってしまう。

その頃になると、店主も酩酊してまっすぐ立てぬ状況だから、他になすすべもなく、客のぼくらがカウンターの中に勝手に入って、酒を作り、冷蔵庫を開けては料理していた。ときには近くのコンビニまで食材を買い出しに行ったりもしていた。

店主のジェリーが、独特の片手を前に何度も突き出す仕種とともにくり返す決まり文句には、「グズは嫌えだ」とか「ゆっくりゆっくり」、「みんな友達」などの他、なぜだか「好き勝手やんな」というのがあった。

だからだろうか、客のいつもながらの好き勝手に、ジェ